

辻邦生 評伝(一)

― 出生から旧制中学校時代まで ―

三 木 サニア

CRITICAL BIOGRAPHY OF KUNIO TSUJI (I)

MIKI Sania

I have studied the works of a writer, Kunio Tsuji for over ten years and reported them in the bulletins. I was to write his critical biography this time. However, it is impossible the critical biography through his life to be printed at a time, and it would take me a few more months to finish them, so I would like to publish the first chapter of "From his Birth to the Days of Middle School" in this issue.

As material, I referred to the chronological record and "Jidensho", "Icho Chiriyamazu", in which he wrote the memory of his father and traced his family's roots, "Nochino Omoi", which is the last autobiographical novel written by Kunio Tsuji, and "Tsuji Kunio no Tameni", "Taezu Kaku Hito to Kurashite" written by his wife, Sahoko Tsuji.

Key words: 1. Libra 2. Enjoyment in Reading

3. Father and Mother

キーワード: 一' 天秤座 二' 読む楽しみ 三' 父と母

一、はじめに

ここ数年来、辻邦生の作品論を発表してきたが、ある方面からの依頼により、急遽、辻邦生の作家評伝を書くこととなった。しかし、辻邦生の評伝は、現在のところほとんど出版されておらず、第三者による資料は極めて乏しい状態である。

しかし、幸いなことに、二〇〇六年に『辻邦生全集』全二十巻が、妻の辻佐保子の編集により新潮社から出版され、その第十六巻は辻邦生の自伝的エッセイや小説が収録されている。また、第二十巻には、詳細な年譜が記載されている。その他、辻邦生の歴史小説の中に、父との思い出や、家系のルーツを辿ったものがあり、妻佐保子を書いた伝記的なエッセイも出版されているので、これらをたよりにまとめていきたいと思う。

今回は、紙数や時間の制限もあるので、出生から旧制中学校までをまとめることにした。

二、出生と幼児期

辻邦生は一九二五年(大正十四年)九月二十四日、東京市本郷区駒込西片町十番地は十三号で生まれた。父三壽吉(靖剛)、母キミの三男である。しかし、長男守彌はすでに死亡、次男の春生は昭和三年に六歳で死亡したために、事実上は長男として生育している。

邦生の命名は、生誕日の九月二十四日、即ち九・二・四からごく単純にとられたそうであるが、「辻」姓と相まって、小学校の頃からいろいろの人にペンネームのような名前だと言われたそうである。ということは、生まれながらにして〈作家的〉運命を担っていた、といえるのではなからうか。

この生年について辻邦生は、後に「幼年期の自画像」^①の中で次のよ

うに述べている。

時代はちょうど二十世紀の最初の四分の一を終ったところであり、九月二十四日は秋季皇霊祭（秋分の日）に当り、昼と夜の長さはそれぞれ正確に一日を等しく分割していた。母の話によると、九月二十三日が終り、九月二十四日がまさにはじまろうとして、真夜中の時計が鳴って間もなく私がこの世に現れてきたのだそうである。安産であった。

星座からみると、乙女座からヴィーナス、つまり金星が天秤座に移っていったその勢にひかれて、私はこの地上に生みだされたということになる。したがって私の星座は天秤座であり、守り神はヴィーナスであり、その時刻に真二つに分割された昼と夜は、等しい量の光と闇を私に与えたのであった。

この事実はいかにその後、私の運命を明瞭に司っているように見える。^②

これによると、邦生は自分の生年の星座を強く意識しているように思われるが、さらに、「自伝抄—小説まで」^③の中にも次のように書いている。

こうなると、私は、それを世紀の四半分とか、昼夜二分とか、天秤座とかいうものに、多少責任を負ってもらいたいような気になる。おそらく体内感覚のなかに、均衡とか、数秩序とか、明晰とかに対する好みがあるのだろうが、それが果たしてどこからくるのか。

それでも私は、自分が金星（ヴィーナス）に導かれていると、とき強く感じることもある。金星は、明け方に上って明けの明星になり、夕ばえの空に一番に輝いて宵の明星となるが、私が最も好ましい美的映像と考えるものも、同じく明け方の自然のなかの透明な

雲であり、また、宵明りの残る大都会のきらめきである。

この二つの好みはまったく相反するように見える。静と動、朝と夕、透明と多彩、孤独と歓楽—それはたしかに対立するものでありながら、美神ヴィーナスはそのどちらへも私を導く。昼夜を正確に二分され、等分にそれに惹かれるほかない私にとって、昼と夜のあわいが、もつとも心の落ち着く時であるとしても、それは当然かもしれない。

福音記者なら「熱からず冷たからず」はよいことではないと言うだろうが、たしかに私は、明晰な数の秩序が好きなくせに、どちらか一方に決断することは得手ではない。実にしばしば昼でもよく夜でもいい。旅に出るのに、北でもよく南でもいい。簡素でもよく、豪華でもいい。

若いときには、こうした性質を優柔不断と違って、悩んだこともあったが、いまはむしろアイロニーの源泉としてそれを愛するようになっていく。

「星座で知る子どもの基本性格」^④によると、乙女座の子供は潔癖で、繊細な神経を持って生まれるが、天秤座の子供は客観的な思考力と強い正義感の持ち主であり、物事のさまざまな面が見えすぎるために優柔不断になることもあるが、美と調和を愛する平和主義者となりやすい、と書いてある。

辻邦生の中には、たしかに天秤座生まれの人の持つ「美と調和を愛する平和主義者」の血が認められるのではなからうか。

中間的存在としての辻邦生を示す一例として、兄弟姉妹の構成があげられる。邦生は二人の兄と二人の妹、一人の弟という六人兄弟のまんなかに生まれている。しかし、先に述べたように、長男守彌は生後間もなく死亡、次男の春生は六歳で夭逝し、邦生のすぐ下に生まれた三枝子も春生の死の直後に亡くなっている。生き残って成長したのは

邦生と弟の愛也、妹の禮子の三人であった。

次兄春生は昭和三年のクリスマスの日に心臓麻痺で急死した。当時、三歳だった邦生は、亡くなった兄のそばにじっと一緒に寝て、何か慰めようとしていた。母が、「春ちゃんはどう亡くなったのよ。もう一緒にいてあげなくていいの」と言っても、兄のそばを離れなかったという。幼い邦生を襲ったこの喪失体験は、どんなにか深い心理的影響を与えたことだろう。

三歳年長の兄春生は、邦生にとって「何かにつけて（私以上のもの）という映像を与えつづけた存在」であった。兄が誠之幼稚園の園庭で、大勢の子供たちと縄とびや鬼ごっこをして遊んでいる「輝かしい」情景を、まだ仲間に入れてもらえない小さな邦生は、感嘆と羨望の思いで眺めていた。

春生のために買った「アルス児童文庫」^⑦は、兄の死後邦生の少年期の財産となったが、その「児童文庫」に対する一種壮麗なものを見ているような感情は、兄に対する邦生の思いを映し出したものに相違ない。

「アルス児童文庫」は大正末期から昭和初期にかけて急速に発展した日本の出版業界のひとつのシンボルであった。『銀杏散りやまず』の「第十七章 回想のなかの肖像」にも、幼少期の邦生の家庭の雰囲気を表わす重要なファクターとして登場する。

私が生まれた大正十四年は、父三十三歳、母二十五歳だったから、いろいろと家庭的な理想も描けたに違いない。兄のために当時出版された「アルス児童文庫」が揃えられていたのも、オルガンが置かれたのも、この理想を実現しようとする若い夫婦の気持ちになってみれば、よく解る気がする。当時は大正デモクラシーの結果、「赤い鳥」が出たり、白秋や雨雀の童謡が流行したりして、社会主義的なロマンティズムと重なって〈文化〉というような雰囲気を作り

出されていた。児童文化もその一環として、ある新しさをもっていた。あの頃は円本の流行もあって、どこの家にもいつても改造社の日本文学全集と新潮社の世界文学全集があった。そして考えてみれば、私たち世代の精神形成の基盤のかんりの部分は「アルス児童文庫」と前記二全集によって形づくられているのである。「アルス児童文庫」は児童向けの百科叢書の趣があり、古今東西の小説、童話、歴史物語、お伽話から科学、動植物記まで含まれていた。（三五九ページ）

そういえば、私の家にも、これらの全集が揃えてあり、「アルス児童文庫」によって私たちは、「アンデルセン童話」や「グリム童話」あるいは「アラビヤナイト」、「イソップ物語」等、東西の物語をはじめ、ギリシア神話や新旧約聖書物語にも出会っていたように思う。現代のように大量の出版物の他、電子機器によるメディアの氾濫の波に呑み込まれて、価値あるものが見失われている状況とは異なり、いわば古典ともいえる精選された出版物が子ども達の精神の糧として供給されていたのである。

亡くなった春生に対する父と母の気持ちは、『銀杏散りやまず』の「第十七章 回想のなかの肖像」にも記されている。

昭和三年夏、（邦生三歳、春生六歳の時）母が春生と邦生を連れて故郷の鹿児島へ里帰りした帰途、関門連絡船で門司から下関に渡ったとき、たまたま東京から迎えに来た父とばったり出会ったのである。その〈驚き〉の感情は、嬉しさ、安堵感なども加わり、いまなお鮮明に残っているという。そして邦生は、父が東京から下関までわざわざ迎えに来た理由を「兄春生が可愛くてたまらず、それで、迎えにきたのではないか」（三五七ページ）と推察するのである。

「兄春生は大正十二年に生まれているから、いわば我家の好況期に際会したわけで、生命力に溢れた憎たらしい私などより、よほどおっ

とりした可愛い少年であった兄は、父の鐘愛の的であったろう」（三五八ページ）とも記されている。

「生命力に溢れた憎らしい私」と書いている幼児期の邦生は、兄と妹がつづけて病死して一人っ子になったため、一時、「家のなかの柱に紐で熊の子のようにつながれる羽目」⁹になった。そして、「辻さんのお宅では子供を熊の子のように綱をつけて飼っている。可哀そうに。可哀そうに。」（同上）という噂はまたたく間に拡がり、母はそのためにノイローゼ気味になったほどであった。

三、名古屋時代

春生の死後、邦生は父の転勤で名古屋に移り、鶴舞公園のそばに住んだ。昭和五年四月頃である。不思議なことに、丁度その年の十一月二十一日に邦生の未来の妻となる後藤佐保子が鶴舞公園のそばで生まれている。この偶然の一致を、邦生が「ヴィーナスの導きで未来の妻の誕生を見守るため、わざわざ鶴舞公園までやってきた。」（同上一八ページ）というのもあるが、こじつけとは思えない。後藤佐保子は後に東京大学で美術史を専攻している時に、大学院生の辻邦生と出会うのである。

幼い邦生はこの公園の花吹雪の下で、花びらを糸でつないでレイのようなものを作ろうとしたけれども、うまくいかず、一時間ほどで放棄してしまった。その上、いつも持ち歩き、近所の悪童たちの羨望の的であった空気銃を花吹雪の中に置き忘れてしまった。家に帰ってからはつと思ひ出して駆けて行ったがもうなかった。

この空気銃の喪失体験は、相当にこたえたらしく、それから後の人生の折々に、これによく似た思いを味わったが、「あの空気銃ほどに口惜しい思いを呼び起こさないようだ。」と述べている。

もう一つ、邦生の名古屋時代の悪童ぶりを示すエピソードがある。

邦生は近所の茶の湯のお師匠さんの家で猫を追いかけて、炉の中に足を踏外し、茶釜の煮え湯を足にかけたことがあった。五歳児とはいえ、羽目の外し方は相当なものといえる。

以前に住んでいた東京本郷西片町は東京帝大界限の学者町で、祖母久子が孟母三遷の教えに従って、子供を育てる上に理想的な場所として選定した閑静なところであった。

それに反し、名古屋の家は、「日刊自動車新聞」の支社となり、「朝から電話は鳴る、大勢の人が出たり入ったりする、郵便物がどつとくる、という有様で、もう私などは誠之幼稚園どころか、その辺の幼稚園にゆくこともできず、ほとんどうちで暮らした。」（同上三六三ページ）という状況であったが、このような「エネルギーの奔騰する庶民的环境のなかにほうりこまれたこと」（同上三六三—三六四ページ）は邦生の旺盛な生命力に見合っていて、生来の野性を思う存分発揚させたに違いない。通常私たちの想像する作家辻邦生の端正なイメージとは相反する、野性的でエネルギー的な側面を生まれながらに具えていたのではなからうか。

四、家系と父母のこと

辻邦生の先祖は、代々甲州石和の医家であった。しかし、明治三十九年、かなり大きな病院を経営していた祖父直記が四十五歳で胸を患って亡くなった後、祖母久子は故郷を棄て、四人の子供を抱えて上京し、当時としては珍しかった女性の事務員となって、子供を育てた。『銀杏散りやまず』¹⁰には、このような「父の死を契機として初めて振り返った一族の歴史」が熱い思いを込めてつづられている。

注目すべきことは、初代辻保順守瓶は、医家としての新しい辻家家譜の創始者となった人であるが、天明八年に本居宣長の弟子となった。守瓶三十九歳、師宣長五十九歳の時である。甲府の辻保順病院に保存

されている辻守瓶の歌稿には、宣長が添削を加えた筆あとが残っている。『銀杏散りやまず』の中で筆者は宣長と守瓶の師弟間の温かい交流のあとを書簡や歌稿からじかに触れ、その思いを味わっている。そして、当時宣長の「弟子たちが全国に千人いたとすれば、本居先生もかなり気骨の折れる仕事を引受けなければならなかったわけである。」と感嘆している。

また、保順の「医は仁術である」という思いは、八代あまりを通じて保順病院を貫く倫理的体質となった。この初代辻保順の文学への嗜好と倫理性は、遠い子孫の辻靖剛、邦生父子にまで受け継がれているといえよう。

邦生の父靖剛については、「幼年期の自画像」や、「自伝抄」に、かなり克明に記されているが、父の死後に書かれた『銀杏散りやまず』は、父の死を契機として見出した〈内なる故郷〉を描いた作品として貴重なものといえる。邦生は、夫の死後故郷を棄てた祖母久子の息子である父の内面に、今なお脈々と生き続ける懐郷の情と祖先累代の血を、辻家のルーツを辿ることによって発見していくのである。

父靖剛の生涯の中核となるものは、全生涯をかけて取り組んだ薩摩琵琶の弾奏と、日本の伝統音楽を守り抜こうとする情熱、努力であった。生業としての自動車ジャーナリズム（新聞発行）の事業も父にとって重要な仕事であったが、靖剛は最後の最後まで、琵琶楽の究極の境地を求めて「修業につぐ修業の生活」をつづけた求道者であった。

『二十世紀日本人名事典』には下記のような記述がみられる。

大正・昭和期の薩摩琵琶弾奏者 日本琵琶楽協会副会長、元・日本新聞協会修練部長 ④明治二十五（一八九二）年六月二十七日 ⑤昭和五十六（一九八一）年十一月二十五日 ⑥山梨県 本名Ⅱ辻三寿吉 ⑦生家は本居宣長門下の辻保順守瓶が開いた保順病院。幼少から薩摩琵琶を愛好、児玉天南、池田天舟に師事。大正五年天舟

らと東京に薩摩琵琶正弦会を創設、同会委員長として正派薩摩琵琶の振興に尽力。第二次大戦後は琵琶界復興の指導者として活躍。昭和三十四年日本琵琶楽協会を設立し理事長、また虎ノ門に薩摩琵琶古典研究所を開いて後継者の養成にあたり、門下生に須田誠舟、清川嵐舟、吉田央舟らがいる。作曲に「明暗」「明暗崩れ」「追慕の曲」。演奏家としても優れ、妙寿風弾法をよくし、得意曲は「武蔵野」「吉野落」「錦の御旗」など。著書に「精神修養読本心の糧」「琵琶楽器とその製作者」など。

私たちは、「琵琶」と聞くと、すぐに『平家物語』を弾き語りしていた盲法師を思い出すが、薩摩琵琶は十六世紀後半に「薩摩藩の島津忠良が武士の士気を鼓舞する目的で盲僧の楽器を借用して教訓歌を歌わせたこと」から始まったといわれている。江戸時代には〈土風琵琶〉と〈町風琵琶〉とが様式的に区別されたが、明治以後はこれらをまとめて〈薩摩琵琶〉の名称のもとに男性的なたしなみとして全国に広まったことである。

邦生は、息子を琵琶楽の後継者にしたいという父の願いに応えることは出来なかったが、「物事に打ち込む」という態度を父から学んだ」と書いている。また、父は、邦生の行動に干渉することなく、「あえて黙って見守るという態度をとった」（同上二九ページ）とも述べている。邦生はそれを「無言で教える『自由と責任』（同上）」ととらえている。

また、父の琵琶楽は邦生の文学に本質的な影響を与えているとも考えられる。「幼年期の自画像」の中で、「私は母の子守唄を聞いたのが先か、『平家物語』を聞いたのが先かわからないとおもっている」（同上二八ページ）と述べているが、事実、邦生が生まれた夜中も父は一心に琵琶を弾いていたという。まさに辻邦生の文学は、「無意識の深みでは、日本の古典の伝統に、骨の髄まで浸っている。」（同上二五ペー

ジ)といえるのである。

後年、小説家となった辻邦生が、西欧を舞台としたスケールの大きい歴史小説(例えば、『春の戴冠』や『背教者ユリアヌス』等)を創作するとともに、日本古典の伝統的芸術に関する『嵯峨野明月記』や、『西行花伝』を書いたのも、父の琵琶楽と深いところでつながっているのではなからうか。それを邦生は「自画像」の中で次のように述べている。

零歳から二歳までの脳の発達は、二歳から二十歳までの脳の発達と等しいそうであるから、父の琵琶楽や、琵琶とともに語られる『平家物語』や『太平記』などが、私の脳の形成に無関係であるとは考えられない。子守歌のかわりに、『平家物語』を聞かされていると、脳のひだの一番深い部分に、どうしても、語りとしての日本語が沁み込んでくる。そしてこれが、意識する以前に、(物語)に対する愛情を私に植えつけなかったとは誰がいいきれよう。(同上六ページ)

このような、父の琵琶楽からの影響とともに、幼児期、母から与えられた影響も看過できないものであろう。

母は母で、私が言葉を理解するようになると、寝る前に、かならず「アルス児童文庫」から何かを取り出して読んでくれた。私は今も、母が読んでくれた一種独特の単調な声を覚えているが、それは、いかにも眠りに入る前の、心地よい音楽のかわりだったように思う。

(同上六ページ)

童話作家のたかしよいち氏¹⁸は、自分が童話作家を志すようになった動機を、幼児期、毎晩のように寝物語に聞かせてくれた母の昔話「鬼ばばあ」に求めているが、幼児の魂に刻印されたものは、生涯生きつづけるものである。

「悲しめる母」の記憶¹⁹は、母亡きあとの追憶の情が色濃く漂っている文である。「幼年期の自画像」に記された「悲しみに沈む、若い、寂しげな女性」(五歳の可愛い盛りに急性の心臓マヒで亡くなった春生のことを、満月を見るたびに涙を浮かべて思い出す母のイメージ)とはうって変わった(強い母)に変身したのである。

夫靖剛の事業は浮き沈みが多く、時代の波は容赦なく襲いかかる。また、薩摩琵琶という伝統芸能に「心底から惚れ込んで」いる芸術家肌の夫の下で、家計のやりくりには、さぞ苦労したことだったろうと邦生は推察している。しかし、母は幼い子供たちに「そうした苦労を気取らせぬことが一番大変だった」そうである。そして、戦中、戦後の過酷な生活が、(悲しみの母)を(強い母)に変身させたのである。終戦後、疎開先の湯河原から東京に戻り、生活が安定したのち、日本人形造りを習い、みるみるうちに上達して「師匠の代りに人形を専門店に納めるように」(同上二四ページ)なり、何年後には独立した。単なる趣味の域を脱し、母も又、その道のプロになったのである。

人形造りとの関連で、せっせと歌舞伎を見るようになったのは、母の内部に「潜在的に、物語や、芝居への愛好があつて、それが突然目覚めたという感じであつた。」(同上)と邦生は書いているが、辻邦生の(物語)志向性は、母からも受け継いでいるといえよう。母の後半生について邦生は次のように書いている。

しかし、母の後半生は、むしろ積極的な人であつた。松原湖の避暑先に遊びにきて、いっしょに裏八ヶ岳に登山し、白駒の池まで行ったことがある。アポロの月着陸のテレビは深夜、夢中になって見ていたし、万博にはわざわざ大阪まで行って、アームストロング船長の持ち帰った月の岩石を見てきたりした。(同上)

辻邦生が急死する直前まで書いていた『のちの思い出』²⁰の中の「不意のおとずれ」には、松原湖に遊びに来た母とともに二人で試みた裏八ヶ岳登山の思い出が記されている。年譜を調べて見ると昭和三十年（一九五五年）七月、「はじめて北八ヶ岳稲子に暑を避ける。」と記されているので、この時の思い出と思われるが、母は五十五歳、邦生は三十歳の夏も半ばを過ぎた頃のことである。

昔は「どちらかというとき陰気で内気な性格であった」（同上二五二ページ）のに、戦時中の生活ですっかり変わり、「行動的でさっぱりした性格になった」（同上）母は、邦生が立てた計画、「八ヶ岳連峰の硫黄岳から天狗岳につづくあたりから入るブナの原始林を通り、白駒の池に至るコース」（同上二五三ページ）を聞いて小躍りして喜んだ。妻の佐保子は気を利かせて家に残った。そして二人は翌朝早く弁当を持って出発し、正午過ぎには目標の白駒の池に着き、池のそばでお握りを食べて下山した。母は「こんなきれいな池にきたことがないわ」（同上二五五ページ）と、湖畔の景色を見て喜んだ。

昼すぎに風が出て、池のそばの白樺がざわざわ揺れはじめた。私たちは池のそばを離れた。私は白駒の池を離れるとき、ふと、母とこの池を見にくることは二度とあるまいと思った。母がこんな山奥にまで登ってきたことは、この生の一回きりの営みなのであり、母もこれを両手で受けとめるように喜んだに違いない。（同上）

この母も、父の死後五年を経た一九八六年（昭和六十一年）十二月一日に亡くなった。邦生は「幼児じみた、あどけない寝顔に見」（同上二二二ページ）える美しい母の死顔を見て、「ああ、母は、やっと春生ちゃんのところに戻るのだな」（同上）と思ったと書いている。

五、小・中学校時代

小学校時代の思い出を書いたエッセイの中では、「図書館への郷愁」^{ノスタルジ}、「赤坂慕情」などが、作家辻邦生に直結する文章であろう。

当時、邦生は、地元の赤坂小学校へ通っていた。四年生の時、一時、東中野の「ヒマラヤ杉に囲まれた西洋風の広い家」（『自画像』二〇ページ）に引越したが、赤坂小学校に愛着を持っていた邦生は電車通学までして赤坂の小学校に通った。

二年ほどして住いは再び赤坂に戻り、氷川神社の裏手にある手狭な家に住んだ。その頃氷川図書館の児童閲覧室に通い、読書に熱中した。

当時は「赤い鳥」や「アルス児童文庫」など大正、昭和初期の理想主義的な児童文学活動が終って、大衆的な「少年倶楽部」が全盛期を迎えていた。佐藤紅緑、山中峯太郎、海野十三、高垣眸、南洋一郎、吉川英治、サトウハチローなどの少年小説が友達のあいだでむさぼり読まれた。田河水泡の『のらくろ』、島田啓三の『冒険ダン吉』などの漫画本や、真田十勇士を扱った少年講談などは教室の中で廻し読みされた。私は次の番が待ちきれず休み時間に友達と並んでこうした本に読みふけたことを覚えている。（同上）

同時代の者にとつては、懐かしい作者、作品名が出てくるが、辻邦生にも、「固苦しい良書」（同上）ではなく、大衆的、娯楽的な少年小説、冒険小説によつて、「子供が本来持っている旺盛な読書力」を「十全に燃え立た」（同上二二二ページ）せた時代があったのである。

この経験から、子供にとつて最も大事なものは「読むこと」の楽しさを知り、「読書が生活の一部になってくると、子供は自分で自ずと良書を求めるようになる。」（同上）と考える。つまり、「読書」は、「お勉強」や「おけいこ」のようなものではなく、食事やお三時や遊びの

ような日常的なものになるのである。

小学校時代の邦生は、氷川図書館の児童閲覧室で「読むこと」の楽しさを知り、日がな物語の世界に没入し、閉館時間が来て外へ出た後も、まだ夢から醒めやらぬ人のように物語の世界をさまよっていた。

「地上にこれほどの至福があるのか、と子供心に何度も思ったものである。」(同上)と書いているが、ここにも、辻邦生における強い物語志向性を見出すことができそうである。

辻邦生にとって、氷川図書館での読書は、初めての図書館体験であり、「読む楽しみがこうした純粋な〈読む状態〉によって強化されることを自然と体得」(同上)させてくれた貴重な体験であった。事実、それは、中学時代、大学時代の熱心な図書館通いにつながり、ひいてはパリ留学時代の国立図書館体験へと結実するのである。

辻邦生が「赤坂慕情」を書いた一九九二年の三月、邦生が愛着し、一時期電車通学までして通った赤坂小学校は一一八年の歴史を終えて閉校した。生まれ故郷というわけでもなく、特別にゆかりのある人物や建物があつたわけでもない赤坂の町が、邦生の子供心になぜか好きだったのである。

赤坂は「完全に下町では」(同上)なく、「他方、赤坂は、青山につづく山の手の雰囲気を持つ町々を抱えていた。」(同上)そのため、クラスの中には役人、会社員、弁護士、医師の子弟、主流となる商人の子供の他、左官、石工、大工、仕立屋などの、職人の子弟もいた。

「まさに下町と山の手のぶつかる接点と言つてよく、後年、私のように小説家を稼業とする人間には、さまざまな家庭を見る機会があつた点で、文字通り天の配慮というべき場所だった。」(同上)のである。

もし邦生が、出生地の本郷に住みつづけていたら、小説家辻邦生はこの世に存在しなかったに違いない。それを彼は「自伝抄—小説まで」の中に次のように記している。

私が屋敷町に育ち、受験校で有名だった誠之とか青南とか高師付属とかに入れたら、おそらく、官僚の端くれぐらいにはなっていただろうが、小説家となることはなかったろう。自分でいかに小説を書くかと思つても、魂の基底を形成する部分に、生命の躍動を養うことができず、結局は、長大な作品を書く力を持つことはできなかったはずだ。

私は今も、芸術制作の根源力は、生命の躍動にある、と信じている。それも、ごく素朴な、飾りのない、健全な躍動である。

この引用文の末尾の「芸術制作の根源力は、生命の躍動にある」ということは、辻邦生の旺盛な筆力とグローバルな作品世界を解きあかす鍵ともいえるものであろう。

小学校時代に開花した読書への興味とともに、邦生は「書くこと」への楽しみを生まれながらに持つていたように思われる。

彼は、「書くことだけが好きで、ただ快楽のために書いている人」(「自画像」三〇ページ)の代表としてスタンダールをあげ、自分自身は大別すると、「おそらくスタンダール型に入るかもしれない。」(同上)と述べている。

しかし、スタンダールのように一挙に作品を書き上げるタイプではなく、「三年なり五年なり書きつづけて、ようやく長編小説を仕上げる型」(同上三〇—三二ページ)という点では、トーマス・マンの影響を受けているかもしれない、とも書いている。

また、「書くこと」の楽しみについては、「小学校のころから何かを空想して書く楽しく、多少でも写実的な気持が混じると、筆が重くなった。」(同上三一ページ)「写実的なテーマを与えられると、私は、勝手に空想したことを実際にあつたことの中に混ぜて書いた。要するに、うそを書いたわけだが、うそを書く筆勢には、うそがつくし、書く楽しさが倍加するので、多少の疾しさがあつたにもかかわらず、それ

を抑制することができなかった。」(同上 傍点は原文のまま)とも書いている。

つまり、小学校時代の邦生は、「書くこと」と「空想すること」が融合合った「書く楽しさ」を享受していたのであるが、中学時代以後、その二つははっきりと分かれてしまい、「文章道を修業する人のように」(同上三二ページ)書くこと、いわゆる「名文」を意識しはじめると、「書く楽しさ」は失われてしまった。

「書くこと」については、この先、紆余曲折を経て、作家辻邦生の人生の中核を占めることとなるのである。

小学校時代をここで終え、旧制中学校時代については、ごく簡単に述べておきたい。

当時、旧制中学校への受験競争は、現在と同様に相当激しいものであった。が、邦生は「生来ののん気な性分から、何とかなるだろうと高をくくっていた」(同上六五―六六ページ)ため、志望校には入れず、日大三中に首席で合格した。

中学時代にも好きな山歩きをしたり、読書や〈書く〉ことをつづけていたが、特筆すべきことは少ないので、邦生の人生に圧倒的影響を与えた旧制松本高等学校時代に移ることとする。

以上でこの稿はいちおう筆をおくが、辻邦生の幼少年期の境遇は、相次ぐ兄妹の死などの不幸はあったが、概して恵まれたものであったと思う。特に、父母の子どもへの愛情、「無言で教える」家庭教育のあり方、積極的な求道的な生き方には教えられるところが大きかった。ここには、現在の日本人が見失っているモラルを再発見できるのでなかろうか。

注記

- (1) 初出『作家の世界』番町書房 昭和五三年二月三日
- (2) 『辻邦生全集一六』「自画像」一三ページ
- (3) 『全集一六』五九ページ(以下、『辻邦生全集』を『全集』と略記する)
- (4) 『星座が教える子育て術』岩瀬恭子 サンマーク出版 一九九三、四、五
- (5) 「自画像」一七ページ
- (6) 同上
- (7) アルス社出版『日本児童文庫』のこと。全七六巻。総合的な児童文化叢書。刊行は一九二七年(昭二)五月―三〇年(昭五)十一月。北原白秋の弟鉄雄が経営する出版社アルス発行。
- (8) 新潮社 一九八九、九、二〇
- (9) 「自画像」一七ページ
- (10) 『銀杏散りやまず』三六五ページ
- (11) 初版オビのことは
- (12) 『銀杏散りやまず』一二四―一二五ページ
- (13) 『全集一六巻』
- (14) 「自画像」一四ページ
- (15) 日外アソシエート 二〇〇四、七、二五
- (16) 『世界大百科事典二四巻』平凡社 一九八八、四、二八
- (17) 「自画像」六一ページ
- (18) 児童文学作家。考古学フィクション、創作民話などのジャンルで数多の優れた児童文学作品を出版。椋鳩十の研究家。現在、久留米信愛女学院短期大学名誉教授、図書館長
- (19) 『全集一六巻』一二二ページ
- (20) 日本経済新聞社 一九九九、一二、七
- (21) 『全集一六巻』六二ページ

参考文献

- 辻邦生 『辻邦生全集一六』新潮社 二〇〇五、九、二五
辻邦生 『のちの思いに』日本経済新聞社 一九九九、一二、七
辻邦生 『銀杏散りやまず』新潮社 一九八九、九、二〇
『二〇世紀日本人名事典』日外アソシエート 二〇〇四、七、二五
『世界大百科事典二四』平凡社 一九八八、四、二八
岩瀬恭子 『星座が教える子育て術』サンマーク出版 一九九三、四、五